

AO/TORI BUNKO

講談社 青い鳥文庫

宇宙人のしゅくだい

小松左京／作 堤 直子／絵





講談社 青い鳥文庫 40-1

宇宙人のしゅくだい

小松左京

1981年8月10日 第1刷発行

1999年7月29日 第48刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-8001

電話 出版部 (03)5395-3536

販売部 (03)5395-3625

製作部 (03)5395-3615

N.D.C. 913 188p 18cm

装丁 久住和代

印刷 図書印刷株式会社

製本 図書印刷株式会社

© SAKYÔ KOMATU 1981

Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-147074-4 (児二)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。)

■この本についてのお問い合わせは、講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。



宇宙人のしゅくだい



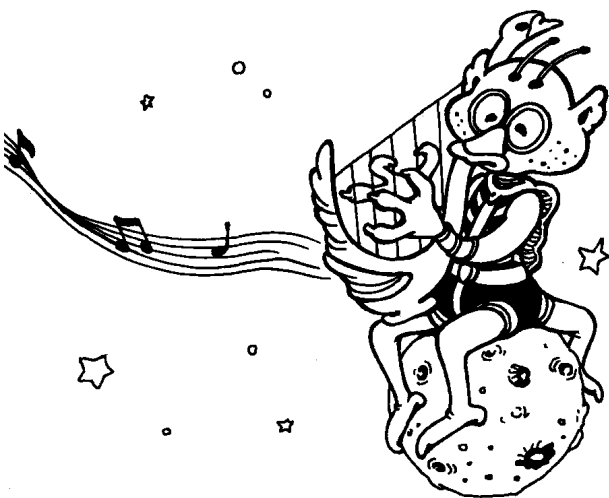
小松左京／作 堤 直子／絵



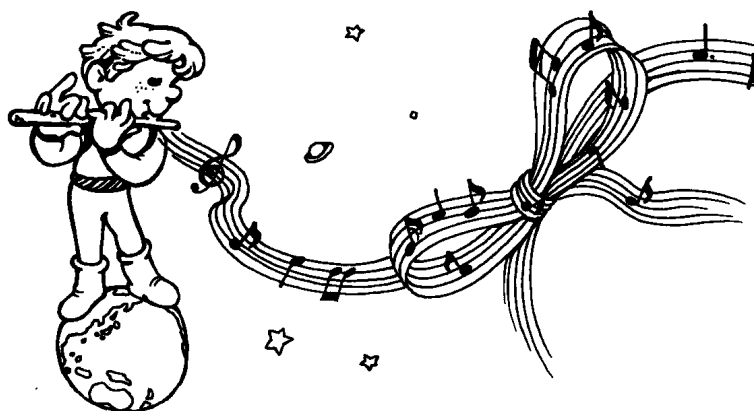
講談社 青い鳥文庫

もくじ

算数のできない子孫たち	5
つりずきの宇宙人	12
宇宙人のしゅくだい	19
ぬしゝになつた潜水艦	26
アリとチヨウチヨウとカタツムリ	34
キツネと宇宙人	41
雪のふるところ	47
地球からきた子	54
タコと宇宙人	60
理科の時間	67
つゆあけ	74
にげていった子	81



解説	180
石川喬司	172
小さな星の子	166
宇宙のはてで	159
宇宙のもけい飛行機	153
未来をのぞく機械	145
冥王星に春がきた	138
六本足の子イヌ	131
ガソリンどろぼう	124
大型ロボット	117
お船になった。パ・パ	110
赤い車	103
空をとんでいたもの	96
地球を見てきた人	89
ロボット地蔵	



算数さんすうのできない子孫しそんたち

「ああ、うんざりしちゃったなア。」と良夫よしおくんがためいきをついてえんぴつを
ほうりだした。

「まったく、こんなに算数さんすうのしゆくだいがあっちゃ、たまらないな。」とケンちゃんもいった。

「いやだなあ、頭あたまがいたくなってくる。」良夫よしおくんは、あおむけになってつぶやいた。



「ほんとだ。算数なんて大きらいだ。」とケンちゃん。

「算数のない国へ行きたいや。」

そのとき、とつぜん二人が勉強している部屋の外で、ドーンと大きな音がした。ジェット機でもおちたのかと思つて、まどから庭をのぞいてみると、ジェット機ではなくて、銀色の大きな球が、庭のキリの木にぶつかつて、かすかなけむりをたてていた。――見ているうちに、その球の横腹がポカリとあいて、中からみような服を着た、二人の男がおりてきて、良夫さんとケンちゃんの方へやつてきた。

「お、おじさんはだれ？」良夫くんはびっくりしてさげんだ。

「宇宙人なの？」

「とんでもない、わたしたちは未来人です。」とその男たちはいった。



「この時間機じかんきにのって、未来みらいの世界せかいからきました。——田中良夫たなかよおさんと野村健のむらけん

一いちさんですね。わたしたちはあなたたちの子孫しそんです。」

「ぼくたちの子孫しそんだって？」ケンちゃんは目をまるくした。

「ええ、わたしたちは、あなたたちの、まごの、まごの、ひまごの、そのまたひまごにあたります。」

「ワア、おかしいや。」と良夫よおくんはわらいだした。

「ぼくたちのまごが、こんなおとなだなんて。」

「わたしたちは、ご先祖せんぞが、どんなくらしをしているか見みにきました。」と二人ふたりの子孫しそんはいった。

「あなたたちは、ご先祖せんぞですから、わたしたちも孝行こうこうしたいと思おもいます。なにかわたしたちに行いえることはありませんか？」

「えっ、ほんと？」とケンちゃんはいった。

「じゃ、ぼくのひまごのひまごたち——ご先祖さまのために、しゆくだいをやってくれ。」

「わかりました。やってみましょう。」

未来からきた、二人の子孫は、二人のつくえの前にすわって、算数のしゆくだいをやりはじめた。——ところが、この二人は、おとなのくせに、なかなか問題がとけず、うんうんうなった。

「だめだなあ、未来人のくせに、こんな問題がとけないの？」

「なにしろ、未来では、計算はたいてい機械がやってくれますので。」と男たちは頭をかいた。

「こんなむずかしい問題をどうやってとくんですか？」

「これは、ツルカメ算さんのくみあわせじゃないか。」

とケンちゃんは説明せつめいした。

「ほら、こうやるんだよ。」

「なるほど。」

と未来人みらいじんは感心かんしんした。

「これはどういうふうにとくんです？」

二人ふたりはすっかりとくいになって、未来人みらいじんに、いろんな算数さんすうの問題もんだいのとき方かたをおしえてやった。おしえているうちに、算数さんすうがだんだんおもしろくなってきて、しゆくだいはすっかりすんでしまったのに、むちゆうになって、いろんな問題もんだいを未来人みらいじんに説明せつめいしてやった。

「よかったな。」と未来みらいへかえっていく時間機じかんきの中で、良夫よしおくんの子孫しそんはクスク

スわらいながらいった。

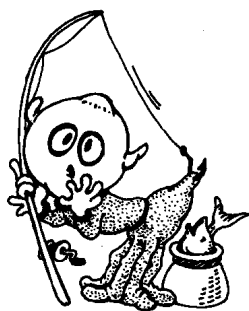
「あれでぼくたちのご先祖たちも、また算数が好きになって、もっと高等な数学もおもしろくなってくれるだろう。」

「まったくだ。」

とケンちゃんの子孫はうなずいた。

「あの二人が、数学が嫌いになって、りっぱな学者になり、あのすばらしい理論を発見してくれないと、だいいち、この時間機が発明されないんだからな。」

つりずきの宇宙人



かぞえきれないほどある、宇宙の星の中には、宇宙人のすんでいる星もたくさんあった。その中には、いろんな、かわった宇宙人もすんでいた。

その星の宇宙人たちは、とてもつりがすきだった。宇宙船にのって、あちこちの、生物のいる星に出かけていき、その星にすんでいるさかなを、みんなつりあげてしまう。

そのため、その宇宙人たちのすんでいる星の近所では、大きなさかなのいる

星が、すくなくなつてしまった。

「このごろ、あんまり大ものがかからない。」と宇宙人の一人は、腕をたたいていった。

「おかげで、腕がなつてしょうがない。」

「この近所のつり場は、もうだめだ。」もう一人の宇宙人がいった。

「どうだ。ひとつ、うんと遠くまで出かけていって、大きなもののいそうな星をさがそうじゃないか。」

「そいつはいい。」

こうして、二人の宇宙人は、宇宙船にのつて、はるか遠くの宇宙に、さかなのいる星をさがしに出かけた。

キラキラ光る、あたたかい星のまわりをまわっている、小さな星の一つに、

二人は、よさそうな場所を見つけた。

「ここなら、だいぶいそうだぞ。」宇宙船のまどから、そのきれいな星を見おろしながら宇宙人はいった。

「ひとつ、メガネでのぞいてみる。」

メガネをのぞいた、もう一人の宇宙人は、うれしそうにさげんだ。

「いるいる！——すぐ大きなさがたくさん、およいでいるぞ。」

「よし、それじゃ、ここにきめよう。」

そういつて、二人の宇宙人は、つりざおをとりました。

「エサは、なにがいいかな？」

「わからん、ひとつ、ケバリ（エサの虫などのすがたをまねてつくられた、つくりもののエサのついた針）をつかってみよう。」

